

## 草津宿歴史ぎやらりい vol. 17

## 御家人浮世絵師と明治時代

「浮世絵」と聞けば、江戸時代のものだと思われる方が多いのではないのでしょうか。しかし、実際には維新を迎え、明治時代になっても浮世絵はつくり続けられていました。

草津市の所蔵する中神コレクションから、明治期を代表する浮世絵師の「豊原周延」の作品を紹介します。

今回取りあげる「東錦昼夜競」は50枚もの連作で、様々な歴史故事を描いています。この浮世絵の主人公・祇王は、平清盛の寵愛を受けた白拍子(歌舞の一種を男装で舞う女性)でした。豊原周延がこの様な歴史故事を描くには、その出自に関係していたように考えられます。周延は本名を橋本直義といい、元は幕府の御家人で、明治維新のころも彰義隊として上野戦争や箱館戦争に参加していました。歌川国芳、歌川国貞、豊原国周くにかがと三人に師事しており、御家人時代に見聞きした江戸城内の風俗を題材にしたシリーズが有名ですが、西洋衣装を身に纏まとった美人画も得意としていました。他には物語や芝居を題材にしたものがあります。周延は、西洋文明の様子を浮世絵に描きつつも、元は御家人という経歴を考えると、古き良き時代に思いを馳せ、このような作品を残したのかもしれませんが。

(2012年1月)



ちかのぶ あずまにしきちゅうやくらべ ぎおう ぎによ  
豊原周延「東錦昼夜競 祇王・祇女」 中神コレクション明治19年